



よびつぎの生活



首都大学東京大学院人文科学研究科教授

下川昭夫 (しもかわ あきお)

1998年、東京都立大学人文科学研究科博士課程単位取得退学。東京都老人総合研究所流動研究員、東亜大学助教授、東京都立大学助教授を経て、2010年より現職。専門は臨床心理学・コミュニティ臨床。主な著書は『中年期・老年期の臨床心理学(ライフサイクルの臨床心理学シリーズ3)』(共編、培風館)など。

借家に大家が帰ってくるのであわてて家を探した。家には骨董と同じで実にはいい値がつけられている。広告では広さ、古さ、駅からの近さといった実にわかりやすいモノサシが用いられているが、ここに住んでみたいという人情の情報は丁寧に省かれている。いい物件が安いと飛んで見に行くのだが、そのたびに住んでみたい気にならないのが常であった。どうやら人情は値に反映されているようだ。

何度もガッカリしたが「ハタザオ地」というのを知ったのが最大の収穫であった。土地が旗竿に似ているからなのだが、たいてい四方をぐるりと囲まれている。中には隣までが数10センチの家もあり、窓を開けると生活が丸見えである。こうなったらなまじ窓をつけず半地下を作り、四角い家を建て、2階の真真中に庭を造るといいんじゃないかと想像してみたが、広い庭付きの家が買える値になるのでやめにした。ここでも値は人情を実にうまく反映している。

ヘトヘトになって借家に帰り、部屋を見渡し一杯やってようやく

落ち着く。この部屋も初めは他人顔だったがずいぶん履き慣れてきた。何のことはない自分の古道具が増えただけだが、もうじきまた元の見知らぬ部屋に戻ると思うと今が妙に懐かしい。それぞれの古道具には定位置があり、時間をかけてその場所を見定めてきた。つい最近のものもあれば、何十年とつきあいが長いものもある。もちろん最初から長いつきあいを決めていたわけではなく、多くの道具が入り出す中でいつの間にか残っていったものである。

気に入った道具を残す行為は人類が生まれてこのかた世界で行われている。十人十色なのだが不思議と残る道具は人が変わっても残ってゆき、百年経った古道具は「つくもがみ」といって魂が宿るといわれている。確かに一杯やっている手元の徳利や杯は綿々と使い込まれて魂が宿り血色良く、つやつやしている。道具好きは酒の染みを「景色」と呼んで法外な値をつけたり、飲み終わった杯をわざわざひっくり返して高台をしげしげ眺める妙な癖がある。これら

も神様をたたえる儀式なのだろうが、自分もご多分にもれない。

バラバラに割れた桃山の破片をつぎはぎして一つの茶碗を作り出すことを「よびつぎ」という。ただ集めて組み立てるだけでもずいぶん難しいが、そんなものはすぐに気に入ら

なくなり、使われなくなってしまう。作る人の技量や見識も重要だが、使う人、残す人との合作である。あらためて部屋を見渡すと、古道具はそれぞれ生まれも時代も違う。何に使ったんだかしたのものではない。しかしそれらが集まることでどうやら持ち主をよく反映しているようだ。ああこれが今の自分なのかと思う。幼いとき、若いとき、年を取ったとき、顔はずいぶん違っているが、これが自分だという共通の表情も持っている。たぶん新しい部屋もそうなるだろう。

だんだん自分の生活全体がよびつぎなのではないかという気がしてきた。骨董収集家としても知られる、随筆家の白洲正子によると「よびつぎという言葉が生まれたのは、地位も職業も教養も、それぞれ異なる人々が、どこからともなく呼び合うように集まって、足らぬところを補いながら一つのを作りあげて行ったからだろう」(『風姿抄』14ページ、世界文化社)とある。むかしむかし道具を作った人、それを使ってきた人、これから使ってゆく人から、生まれてこの方、自分を育ててくれた人、自分と関わった人、借家の周りで生活を共にする人の顔までが、だんだん見えてきた。杯が進みすぎたせいもあるが、多くの人によるよびつぎで作られた生活はそれらの人情がはっきりと反映されている。人情が値に反映されている訳がなんとなくわかってきた。



座辺師友